

### 鵠と扁鵲：魏志倭人伝鳥考

INUKAI, Kazuo / 犬飼, 和雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

39

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

1992-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006618>

## 鵠と扁鵲

——魏志倭人伝鳥考——

犬飼和雄

『三国志』の魏志倭人伝、正式には東夷伝・倭人が中国の史家陳壽によって書かれたのは三世紀だから、そこに描かれている倭国、古代日本についての記述は、三世紀以前のものである。またこの魏志倭人伝をもとにして書かれた『後漢書』の東夷伝には、漢の光武帝によって西暦五七七年に倭の国王に金印を紫授したとされるされているから、そこに描かれている倭国は一世紀、あるいは紀元前から三世紀までの記録と考えられる。

同時代を記録した日本の資料と言えば、『古事記』と『日本書紀』であるが、いずれも八世紀になって書かれたもので信頼性がないばかりか、魏志倭人伝に見られるような古代日本に関する具体的、客観的な記述はほとんどないと言ってよい。この意味からも、魏志倭人伝の記録は大変貴重なものだし、古代日本についての研究に欠かせないものである。その記述が現在までさまざまに論議されているのは当然である。またその記述が中国を中心におこなわれているのも当然で、間接的には中国の記録だと言うこともできる。したがって当時の中国が有していた文化を無視しては、この記録を正確に理解できないと思われる。

古来日本で論議の中心となって現在におよんでいる倭国の位置に関しても、それを正確に理解するためには、陳壽のというより、当時の中国人の表現を理解しなければならない。また卑彌呼を中心とした政治形体の記述にして

も、中国側の視点がそこに存在しているの言うまでもない。それに対して、この記録の理解について、日本では日本側の資料「古事記」や「日本書紀」との一致点を見出そうとする論議が現在に至るまでおこなわれている。例えば倭国の女王卑彌呼は、日本のどの天皇であったのかとか、魏志倭人伝の「邪馬臺」の臺はまちがいで、「後漢書」の「邪馬臺」の臺が正しいとかである。勿論その根拠は「古事記」「日本書紀」に日本の天皇は紀元前から大和・ヤマトにおいて日本を支配してきた、その大和の発音になるためには、魏志倭人伝の壹より「後漢書」の臺の方が都合よいからである。こうした議論は、実は中国側にとつて全く関係ないどころか、夢にも考えなかったことであるのはたしかだが、こうした視点に日本が立っているために、その内容、例えば卑彌呼と中国との従属関係を示す内容などはほとんど問題にされないできている。「古事記」「日本書紀」にそうした内容に相当する記録がないからである。

しかし魏志倭人伝の中には三世紀以前の中国と日本の関係が具体的に示るさわれているばかりか、日本の資料では全くわからない古代日本の文化、またそれを見ている中国文化の視点をうかがい知ることができる。例えば宗教の問題がそうである。「一女子を立てて王と為す。名づけて卑彌呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑す」という一言は古代日本の政治宗教がシャーマニズムによっておこなわれていたことがわかるし、すでに陰陽思想による哲学が確立し、老子、孔子の思想が存在していた中国が鬼道をどう評価していたかがわかるのである。またこの資料があるから、「古事記」の中で倭建命が東国遠征中、甲斐の国に立ちよつた時、御火焼の老人とかわした問答の内容、老人の性格が推察できるのである。

甲斐の酒折宮で倭建命は御火焼の老人に、私がここまで来るのにいく日かかったかと質問する。すると老人が九

夜十日だと答える。その答が正しかったので、倭建命は老人を東國の国造、つまり支配者に任命している。この老人に正しい答ができたというのは、老人が予言能力を持っていたということであり、その人物が支配者になりえたというのは、老人に卑彌呼を見ることができ、そこにも古代日本の政治形體が見られる。これも魏志倭人伝があるからで、日本の「古事記」「日本書紀」からでは、この老人の実像を容易にうかがい知ることができない。なお「日本書紀」ではこの老人を抹殺しているが、「日本書紀」が書かれた八世紀は、天皇の存在が確立されており、卑彌呼や老人のようなシャーマンが日本の支配者だったと認めることは不都合だったと思えたのであろう。

また魏志倭人伝には風俗・習慣について興味深い記録がいくつもある。勿論これは「古事記」「日本書紀」には全く見られないものである。「其の風俗淫ならず。男子は皆露<sup>みず</sup>紛<sup>み</sup>し、木<sup>たぎ</sup>を以<sup>も</sup>つて頭に<sup>かぶ</sup>拵<sup>け</sup>、其の次は横幅、但々結束して相連ね、略々縫うこと無し。婦人は被髮屈<sup>かみ</sup>紛<sup>み</sup>し、衣を作ること単衣の如く……」と衣服の記録。「男子は大小となく、皆黥<sup>いん</sup>面<sup>めん</sup>文<sup>ぶん</sup>身<sup>み</sup>す。……諸國の文身各々異り、或は左にし或は右にし、或は大に或は小に、尊卑差有り」と墨の記録。「倭の地は温暖、冬夏生菜を食す」と生野菜の記録。こうした記録は日本人にとっても現在でも容易に納得できるし、同時に生野菜をほとんど食べない中国人からの記録だというのもよくわかる。この論文とは直接関係ないが、「好んで沈没して魚蛤を捕え」とか「文身し亦以つて大魚水禽を厭う」とか「真珠・青玉を出だす」という記述はどう考えても倭國が海岸に面した國で、大和のような内陸の國とは考えられない。少くとも中国では考えていなかったと思われる。

しかし今ここで問題にしたいのは、次の一節である。

——その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵝無し——

その地とは、倭国をさしているのは言うまでもないが、この一見何の問題もありそうもない記述の中に疑問に思われる問題点が二つある。一つはこの記録が否定的な記録だということである。否定的な記録の場合は、単純な倭国の紹介でないことは勿論である。中国にあつて日本にないという場合、そのものは中国にとって誇るべきものか、重要な意味を持っている場合だと考えるのが常識的である。少くともその有無が中国にとって記録する意味がある場合だけである。このように考えて、この否定的な記録を見ると、第二の問題点が浮かびあがつてくる。それは、鶇についての記録である。数多い鳥の中で、特殊な鳥とも思われない鶇が、どうしてこの否定的な記録に入っているのかということである。別のところで「黒雉有り」と鳥に関する肯定的な記録があることも、この鶇が疑問に思えてくる理由である。勿論ここにあげられている他の動物との比較においても、この鶇の有無の記録は、単なるある種の鳥の存在に言及しているにすぎないとは考えられないのである。鶇の有無は、単なる鳥の有無ではない、少くとも古代中国人にとって無視できない存在だった、そうとしか考えられない。それなら鶇とは古代の中国人にとってなんであつたのか。

鶇という字の発音は、ジャク、シャク、サクである。この鳥は日本語ではカササギ、コマガラス、チョウセンガラスと呼ばれている。日本では主として北九州で見られる。その日本語名を見てもわかるように、十六世紀末に朝鮮から輸入されたものだと言われている。魏志倭人伝の記録は正確である。カラス科に属し、翼長二十センチあまり、地色は黒色で、腹部、肩は白色という、黒と白に染め分けられている鳥である。どちらかといえばありきたりの鳥で、日本でこの鳥が特別扱いされたという話は聞いたことがない。

私は成都へ来るまで、この鳥を見たことはなかった。もっとも成都で見たと言っても、成都のどこにもいるわけ

ではなかった。それは偶然眼にした一枚の写真でだった。若い成都の油絵画家李熙のところへ絵を見に行った時、中国の少数民族韓族の写真があるが見ないかと言われた。韓族とは四川省南部から雲南省の山岳地帯に住んでいる民族で、李熙はもっぱら少数民族を描いている。その写真を見てみると、黒と白に染め分けられた鵠が雪を背景にしてうつっている姿が眼にとびこんできた。つまり、見たのは写真であって実物ではなかった。それでも私としては成都で見たとしか言いようがない。成都で実物には、まだお目にかかっていない。成都周辺の山岳地帯にはいると言われている。それでもこの写真の鵠を見たおかげで、あらためて一つのヒントを与えられたのは事実だった。

ところで先の魏志倭人伝の記録「牛・馬・虎・豹・羊・鵠無し」と記述されている動物の中で、牛・馬・羊は人間の生活とは切っても切れないほど密接な関係があり、多分そのためだと思われるが、時に神格化されている。その有無を古代の中国人が問題にして記録する意味は容易にうなずけるところである。それに対して、虎や豹は恐怖と畏敬の対象であり、当然神格化されており、こうした動物の有無を無視できなかつたことはよくわかる。中国側から見て、こうした動物の有無は、同時に、文化の違いというより差を象徴していると考えても不思議ではない。

例えば、殷（商）時代の青銅器の多くは祭祀用だったが、その中の「饗きやう」は牛と虎を組み合わせたものだとされている。後になると虎は想像上の動物竜と組み合せられている場合が多いが、虎が竜と同じように神格化されている証処である。また「史記」に次のような記録がある。「熊・熊・貔・貅・虎を教え、もって炎帝と阪泉之野に於て戦う。三戦、然る後に其の志を得る」これは黄帝が炎帝と戦った時の記録だが、これは実際の動物をひきいたと言うのではないのは勿論である。普通こうした動物をトータルとする部族をひきいて戦ったと考えられる。なお貔や貅や獬は豹に似ているとも、または豹だとも言われ、ここでは虎と豹が完全に神格化されている。

ところが鵠となると全くちがうことに気がつく。牛や馬や羊のように人間にとって不可欠のものでもなければ、それがいるといないでは文化の差が生じるといったものでもない。また虎や豹のように畏敬の対象になり得るものでもない。少くとも神格化された具体的な例はなく、単なる数多い鳥の一種にすぎない。強いて言えば、燕と同じように黒と白に染めわけられているという特徴は持っているが、それにしても、特に珍重されるような鳥ではない。これが鳥葬に見られる鷲のような鳥とか、孔雀のように美しくて大きな鳥ならわかるのだがと、少くとも最初のうちはそう思つて首をひねるだけだった。

しかし、鵠は牛や馬や虎や豹や羊と並記されている。常識的に考えれば、鵠は前記の動物に匹敵する、いやそれ以上に古代中国において無視できない重要な存在のはずである。

この視点に立つと、鵠という字の形式が目につく。鵠の古字は誰で、佐とは尾の短い鳥のことであるが、どちらを見ても鵠は昔の鳥と書かれている。鵠がわざわざ昔の鳥と書かれているのであれば、ただの鳥ではないと推察できるが、それなら今の鳥とは何か、また何時の時代を基点にして昔と言ったのかとなると、もう全くわからなかった。

たまたま成都の四川大学で研究する機会を与えられたので、さっそく四川大学の古代語や古代史の教授たちに、鵠という鳥は古代中国でどんな意味を持った鳥なのか、どうしてこの鳥が昔の鳥なのか、今の鳥とは何かと質問してみた。しかしこれといった具体的な納得のいく返事はもどってこなかった。それでもわかったことが一つある。それは、私の質問に答える資料がないらしいということである。勿論この場合の資料とは直接資料のことである。そうだとすれば、このあと鵠を追求するとすれば、間接資料にもとづく他ないということである。

間接資料として浮んでくる言葉に扁鵲という言葉がある。と言つても扁鵲というのは鳥のことではなくて人間のこ

間接資料として浮んでくる言葉に扁鵲という言葉がある。と言っても扁鵲というのは鳥のことではなくて人間のことである。最初は魏志倭人伝の鵲と扁鵲の接点があるとは、全く想像もしなかった。

扁鵲とは鳥とは全く関係なく、古代中国においてもっとも有名な名医の名前である。しかも扁鵲という名医は、古代中国に二人存在している。

一人は黄帝時代の名医と言われた人物である。「史記」は中国の歴史をこの黄帝からときおこしているが、中国の歴史は殷からその裏付けはあるが、殷の前の夏についてはその存在が立証されていない。黄帝はその夏以前の皇帝で伝説的色彩の強い人物である。したがってその頃の名医だったと言われる扁鵲も何時頃の人かわからないだけではなく、伝説的な人物だと考えられる。一説には黄帝は中国医術の祖と呼ばれているが、実質的にはこの扁鵲が医術の祖だったのではないかと考えられる。しかしいずれにしろ、この扁鵲に関する記録はほとんど伝わっていないから、この扁鵲と鳥の鵲との関係を見つける方法はないと言つてよい。

もう一人の扁鵲は、戦国時代の秦越人と呼ばれている有名な名医の別名である。戦国時代と言つて紀元前四百年頃から二百年頃までで、この扁鵲のことは「史記」にくわしく述べられているから、黄帝時代の扁鵲とちがつて歴史上の人物といつてよいが、実際にはその本名の秦越人という名前にすら疑問がある。この扁鵲は戦国時代の秦と越の国に深いかかわりをもっている。そのためそこから生まれた名前だと考えられるし、それにこの扁鵲が活躍した期間は二百年以上におよんでいる。つまりこの扁鵲は個人の呼び名というより医術に従う人につけられた名称だと考えた方が妥当である。そう考えれば、扁鵲が二人いてもなんらおかしくない。

この戦国時代の扁鵲については、その名医ぶりが「史記」の中でさまざまに語られている。おそらくこの時代の



日本の医術はシャーマニズムによる原始的なものだったと想像されるが、それを記録したものは全く存在していない。かろうじて魏志倭人伝の卑彌呼の記録によってその一端をうかがい知ることができるだけである。

この扁鵲は長桑君という医者から医術を学んだ後、謎の老人から医術をおそわるが、その老人は扁鵲に医術を教えたあと煙のように消えてしまったと語られている。この謎の老人が黄帝時代の扁鵲で、秦越人が扁鵲と呼ばれるようになったのはこの話によるものではないかと考えられるが「史記」はその点に関しては全く何も語っていない。この扁鵲は死んだ人間を生き返らせたとか、相手を見てひと目でどこが悪いかわかったとか述べられている。興味深いのは針をよくしたということである。中国ではこの時代に「黄帝内経」という医学書が書かれている。この本の題名は、黄帝を医術の祖と考えてのことだが、中国医学の奥の深さが知られる。この「黄帝内経」は当時の中国医学を集大成したもので、すでに薬草ばかりか鍼灸による治療法が述べられている。

この秦越人の扁鵲はあまりにも名医だったために、秦の大医、令李醯<sup>3</sup>にわたまれて刺殺されている。しかしここでは扁鵲の医術を問題にしているのではなく、古代中国の二人の医者にもっと広い意味では、名匠の名にどうして鵲が使われていたのかと言うことである。少くとも鵲と医術は密接な関係があることはまちがいない、その理由はどこにあったのかということの問題にしたいのである。それがわかれば、魏志倭人伝の鵲無しという記述の意味がわかると思えるからである。なお扁鵲の扁は、よろこびをもたらすという意味の扁だと考えられる。漢代の石刻画に、扁鵲像があつて今に伝わっているが、その絵は人面鳥体になっている。その絵からは、鳥が鵲かどうか明確ではないが、鵲であることはまちがいないであろう。これを見ても、中国古代医術と鵲は密接につながっているのはわかるが、今の鵲についての用法には、直接医術と結びつくものは残っていない。しかしこの鵲を

使った言葉には興味をそえられる用法が多く、鳥の中で鶺鴒という字のような用法を持ったものは他に見当たらない。

ただ興味深い用法が数多くあるのも事実であり、そこからいろいろと推察することはできる。

例えば、「鶺鴒音」というと、喜びのたより、うれしい手紙という意味である。「鶺鴒喜」というと、吉事の前兆を意味するし、鶺鴒も同じである。今でもその声を聞くといふことがあると喜ぶ人があるという。この吉事が何か、現在では明らかにすることができないが、この吉事の中に病氣完治があると考へても無理がないような気がするし、そうすれば、鶺鴒と医術との接点が生まれてくるが、鶺鴒という鳥を古代中国人がどうしてそう考へたかとなると、これだけでは全くわからない。また「鶺鴒橋」というと、七夕の夜、織女が渡る橋のことで、織女が鶺鴒に乗って天の河を渡るといふ伝説にもとづく。ここでは鶺鴒がある種の神格化されているのがわかる。もつと具体的には「靈鳥兆喜」といふ熟語がある。ここでの靈鳥とは鶺鴒のことで、この場合は鶺鴒は単なる鳥ではなくて、完全に神格化されているのがわかる。

日本で調べてわかったのは、ここまでだった。鶺鴒という鳥がどうして神格化される資格を持っていたのかという問題になると、何の手がかりも得られなかった。当然医術との関係も先に述べた推察の域を出なかった。成都へ来てもしばらくは同じだった。

この問題に関する一つのヒントを与えてくれたのは、しかし、本でもなければ中国の学者でもなかった。

成都へ来て半年ばかりたったある日、成都晩報という成都の夕刊紙に、羅芸書画展開催の知らせが出ていた。私は羅芸という言葉にひかれて足をはこんだ。最初は仏教書画展かなと思つて出かけたのだが、羅芸というのは若い画家の名前で、それは羅芸の個展だった。水墨画と油絵の技法をませ合せたような絵で、絵は極端に変形された幻

想的な裸婦や、おそらく民間伝承にもとづくと思われる僧や、鬼のような奇怪な絵だった。私は中国でも日本でもこのような絵を見たことがないので、ひきつけられるように眺めていたが、勿論この時、鵲や扁鵲は頭の片隅にもなかった。

ところが、そこで思いもかけない絵に、日本では絶対に見ることのできない一枚の絵にぶつかった。

それは扁鵲、それも戦国時代の扁鵲、秦越人を描いたものだった。勿論その絵も普通の人物画などというものはなかった。

扁鵲は真蒼な顔をして壺の中に閉じこめられていた。足に相当する部分には鳥の羽が五本はえており、その扁鵲の下では、子供を鳥が診察していた。その羽や鳥が鵲であることはまちがいがなかったが、鳥も変形されているので、絵からはその鳥が鵲であるかどうかはわからなかった。

しかし私の注意をひいたのは、壺の中ではなくて、扁鵲を壺に閉じこめているその蓋だった。蓋が陰陽図になっていたのである。

この若い画家が陰陽図と扁鵲と鵲の関係をどのように理解していたかはわからないが、他にも民間伝承にもとづく絵を何枚も書いているので、この絵もなんらかの民間伝承にもとづいて、扁鵲と鵲を壺の中に閉じこめて、陰陽図で蓋をしたにちがいない。それにしても陰陽図とは、今まで思いもつかなかったが、こうして具体的に目の前に提示されると、一つの解答を示されているような気になった。

陰陽図とは、円を曲線で黒と白とに二等分し、黒い部分には白い眼を、白い部分には黒い眼を描いたものである。これは万物の根源を象徴的に描いたもので、中国古代の基本的な思想、哲学、つまり、陰陽思想の図である。この

世界は、人体を含めて、陰と陽とのバランスの上に成りたち、そのバランスがこわれると、例えば人体で言えば、病気になると言うのである。この図が道教や易で象徴的に使われるのも、基本思想が同じだからである。この図が何時頃作られたのかはわからないが、陰陽思想の誕生とともに作られたとも考えられるし、いずれにしてもその歴史は古いものにちがいない。

ところで、陰陽思想と医術との関係は、現在でも明白である。民間の中国医は、今でも病人の体を陰と陽で診断する。つまりこの図で示されているように、人体は白と黒、つまり陽と陰とのバランスがとれている時が健康な時でどちらが強くなってもいけない、病人はバランスがくずれているのだから、バランスを元に戻そうとするのが医者であると考えている。

先の陰陽図はそうした考えを示した理想的な図だが、この黒と白に染め分けられた図を自然界に求めるとすれば、鵠ほどつてつけの動物はいないことに気がつく。鵠は陰陽図をそのまま具顕化した鳥だということがわかる。陰陽図の二つの眼が鳥の、鵠の眼だというのはうがちすぎかもしれないが、前記のように考えて陰陽図の眼を見ていると、不思議と鳥の眼に見えてくる。

このように古代中国人が、鵠を陰陽思想を具顕化した鳥と考えて神聖視し医術と結びつけた、だから古代の名医は扁鵲という名前になった、と考えられる。先の扁鵲の絵は、まさにこの関係を示したものだと言える。

しかし鵠がその黒白模様のために神格化され、やがて医術と結びついたところで結論するには、もう一つ根拠が薄弱である。この結論のためには鳥が、他の黒白の鳥が神格化された例がないと十分ではないし、それにこれだけは、どうして鵠が昔の鳥なのか説明できない。一体今の鳥とは何なのかという問題も同じでこれから先はいくら

調べてもわからなかった。それを解決してくれたのは、成都の町でふと見かけた一枚の陶板画だった。しかもそれを記念にと私が買ってしまつたら一枚しかないとのことで、その陶板画は店先から消えてしまった。もし先に他の人に買われたら、いまだに答が見つからなかったかもしれない。成都は私にとって先生だし書物だと不思議の感を強くしている。

その陶板画は、空に白い鳥が七、八羽飛び、その下で三人の女性が水浴をしているもので、三人仙女という題がついていた。最初見た時は鳥が白かったのと、仙女という題に影響されてこの絵が何か全く気がつかなかった。それでもひかれるものがあったって眺めているうちに、鳥が一羽をのぞいて卵をくわえているのに気がついた。一羽だけ何もくわえていなかったから、鳥が卵をくわえているのに気がついたと言つた方がいいかもしれない。どうやらこの陶板画を造つた陶工はまちがえた、この鳥は白いはずがないのだ。これは明らかに簡狄水浴図なのだ。それに気がついた時、鵲の意味が次第にわかつてきた。簡狄水浴図については、『史記』の中に次のような説明がある。

—— 殷の契は、母を簡狄と曰う。有娥氏の女なり。帝嚳の次妃となる。三人行浴して玄鳥の其の卵を墮すを見る。簡狄取りて之を呑むに、契を生む ——

この契は、殷の始祖だと言われる人物である。なお帝嚳とは舜だとも言われている。

つまり簡狄が他の二人の女性、侍女だと思われるが、と三人で水浴していたところ、玄鳥という鳥がやってきて卵を落とす。簡狄がその卵を飲んだところ、殷の始祖となった契が生まれたというのである。

ここで言う玄鳥とは文字通りは黒い鳥という意味だが、実際には黒い鳥ではなく、鵲以外のもう一つの黒と白の鳥、燕のことである。燕は腹部が白く、黒と白の鳥であることは言うまでもないが、だからこそ契誕生にまつわる

伝説の中で聖鳥として扱われたにちがいない。

この説話は、契を生んだから燕が神格化されているというだけではない。明らかにこの説話は卵生伝説の一つである。卵生伝説を持った種族は、鳥をトーテム、つまり鳥を自分達の祖先だと考えた民族で、この場合鳥はその民族の神である。殷は燕をトーテムとする民族だったと考えられる。おそらく燕の黒と白の模様を見て、そこに陰陽思想が具顕化されていると考え、トーテムを選んだにちがいない。ここでは燕が完全に神格化されている。

だとすれば、玄鳥以上に象徴的な黒と白の鳥、鵠が他の種族のトーテムだったということは容易に考えられる。しかも鵠は殷以前の民族のトーテムだったことは、黄帝の時代、それが殷よりどのくらい昔かわからないが、に鵠という名医がいたということで判断できる。今の鳥というのは、殷の時代の聖鳥燕で、それ以前の古代民族の聖鳥が鵠だったと思われる。

この根拠としては、甲骨文、金石文といった最古の文字を作ったのは殷だからである。殷が文字を作り、昔の鳥と書きあらわしたのである。それは、金石文の中にすでに、鵠が誰という字で書かれていることでわかる。ついでに言うと燕という字も金石文の中には存在している。ここで少し補足しておく、金石文とは、金文と石文のこと、殷の時代の青銅器に彫られた文字が金文、石碑に彫られた文字が石文である。骨に刻られた文字が甲骨文で、殷の時代に作られた最古の漢字である。

それなら鵠をトーテムとした民族はどれであったのだろうか。いろいろ考えられるが、簡狄が有娥氏の娘であるから、有娥氏のトーテムだったのではないかということが一つである。また帝嚳の次妃だったというところから、帝嚳のひきいた種族だったとも考えられる。しかしすでに黄帝の名医に扁鵲が存在していたところを見ると、それ

に黄帝自身医術の祖とも文字を作ったとも伝えられているところを見ると、黄帝のひきいた種族のトーテムだったと考えられる。ただ黄帝自身は黄熊とも呼ばれており、黄帝の属した民族は熊をトーテムとしていたと考えられる。したがって、黄帝に属し医術を含めて文化を担当した種族が鵠をトーテムとしていたと考えるのがもっとも妥当に思われる。そしてその時代は、殷にとつてもう昔だったことはまちがいない。

このように見てくると魏志倭人伝の「鵠無し」という記述は、単なる鳥の有無を述べた記録ではなく、当時最高の文化を有した中国が、未開の倭国の未開ぶりを象徴する記録、広い意味では文化の差、狭い意味では日本の医術の未開ぶりを暗に述べた記録だったということがわかる。この事は、魏志倭人伝の中に間接的にはあるが、医術に関する記述が三か所もあるという事実からも証明できる。

その一つが、次の記録である。

—— 鬼道に事え、能く衆を惑す ——

これが古代日本の宗教シャーマニズムのことを述べたものであることは前に述べたが、呪術という手段によって病気の治療を行うことも、シャーマニズムの一つだということは論のないところで、日本の医術に言及していることは言うまでもない。しかも衆を惑すと表現されているところは、すでに薬草を用い鍼灸を利用して中国にあって倭国の医術がどのようにうつつたかは言うまでもないであろう。

もう一つは文身、黥面に関するものである。

—— 断髮文身、以って蛟竜の害を避く……文身し亦以って大魚、水禽を厭う ——

この記述は明らかに墨が人間の身を守るということで広い意味では医術と考えられる。この文の背景には、中国

の墨に対する見方が存在していることはいうまでもない。中国においては墨刑が古く殷の時代には実施されていたが、魏志倭人伝が書かれた頃にはすでに廃止されている。おそらく墨が野蛮な風習だと考えたからにちがいないからで、それを身を守ると考えて利用している倭国の未開ぶりをそのまま記録したものである。

この中で直接病気の治療に言及しているのが持衰についてである。持衰については次のようにしるされている。

——其の行来、渡海、中国に詣るには、但に一人をして頭をくしけずらず、蠟蝨を去らず、衣服垢汚、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。之を名づけて持衰と為す。若し行く者吉善ならば、共に其の生口、財物を顧し、若し疾病有り、暴害に遭えば、便ち之を殺さんと欲す——

この文章は中国へ行く船の中だけに限定されているが、倭国においても疾病にかかるかかからないかは持衰に左右されると、当時の倭人達が考えていたと見ることが出来る。いずれにしても倭国の医術に言及した文章であることにかわりなく、この持衰も鬼道の一つであったにちがいない。少くとも中国人はそう見ていたと思われる。

ここに医術を通しての古代中国の倭国、古代日本を見る視点が存在しており、それが中華思想によるものだとまでは言わなくても、中国にとって鶺鴒の有無は無視できないものであったことがわかる。ひるがえって考察すれば、古代中国にとって鶺鴒は鷲や孔雀など足もとにおよばないほど大きな重要な存在であり、牛・馬・羊・虎・豹に匹敵するどころか、それ以上の存在だったことがわかるのである。「鶺鴒無し」明らかにこれは古代中国と日本の文化の差を明示した一文だった。



魏志倭人伝鳥考

参考文献

史記

三國志

後漢書

山海經

金石文辭典

古事記

日本書紀

魏志倭人伝 岩波文庫